



御土居遺跡（南東から）



白山城跡（御土居遺跡から）

白市の歴史と地名

文亀3（1503）年、安芸国の有力な領主平賀弘保によって白山城が築かれました。

白市の起源については、養国寺の門前町として発展していたという説もありますが、戦国時代にはこの地域が「白山」と呼ばれていたこと、白市で最も古い井戸が白山城跡の麓と平賀氏の居館跡の麓に残ることなどからすると、白市の町も平賀氏の城下町として形づくられたと考えられます。

戦国時代の白市について記されたものはありません。しかし、地形や地名からある程度の推測が可能です。例えば、本町と栄町の通りが108度の角度で交差することから五角形の都市計画があったとの説も出されています。

戦国時代に遡る白市の地名には、武家屋敷と思われる「御屋敷」、「宮内殿」、「兼行屋敷」、「名井屋敷」、「土居の内」、「京阿弥」、「久保殿」、「右京殿」、「友安屋敷」、「松尾殿」などがあり、白市周辺の谷筋をふさぐように配置されています。その中心に「御土居」があり、平賀氏の居館を守る態勢になっていたことがわかります。

町の北側の高台には「四十九院」、「長慶寺」、「浄土寺」の地名が残り、養国寺と合わせて寺院が建ち並ぶ様子がうかがえます。

当時の商工業地区は、白山城の西麓にあったらしく、「鉄砲屋」、「土器屋町」、「ミセヤ畠」などの地名があります。

慶長5（1600）年の関が原の戦いの後、平賀氏は毛利氏とともに山口に去り、白市は町人の町になります。町並みが現在のようになったのもほぼこの頃のことと考えられます。

城下町でなくなった白市はどのようにして繁栄を維持したのでしょうか。ヒントは江戸時代の牛馬の数の変遷にあります。

江戸時代初期には、牛が5頭、馬は23頭と圧倒的に馬のほうが多くいました。一方、江戸時代末期には、牛の25頭に対して、馬はたったの3頭に減ってしまいます。また、江戸時代前期には馬具屋や駕籠屋といった輸送に関わる職業の人がたくさん住んでいました。これらのことから考えると、戦国時代に平賀氏の領土の中心にあったことから、領内どこからでも白市を通るように整備された道を活かして、沿岸部と内陸部を結ぶ輸送の拠点として発展した町であったと思われます。江戸時代後期以降は西条などの宿場町にその機能

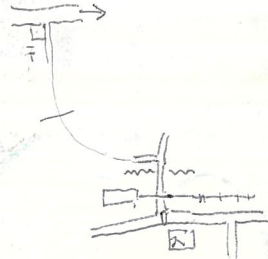
を奪われますが、蓄積された富によって近代まで繁栄を維持してきたと言えます。

白市の町並みは、現在も江戸時代の名残を強くとどめています。重要文化財の旧木原家住宅をはじめ、勝田家住宅、養国寺、土宮神社など江戸時代前期の建物も多く残っています。

昔ながらの路地も多く残っています。「西の河通り」や「土器（かわらけ）小路」、賀茂屋という屋号の家があったことからつけられた「賀茂屋小路」など、現在では忘れかけられたこれら通りの名前なども大切に守っていききたいものの一つでしょう。



西の河通り（東から）



伊東 敏光 Ito Toshimitsu
 笠原 浩 Kasahara Hiroshi
 木村 育子 Kimura Ikuko
 木村 東吾 Kimura Togo
 近藤 亘 Kondo Toru
 近藤 博明 Kondo Hiroaki
 後藤 佑介 Goto Yusuke
 櫻井 友子 Sakurai Tomoko
 正司 強 Shoji Tsuyoshi
 高木 茂登 Takagi Shigenori
 アシュレイ ディーン Ashley Dean
 寺田 勝彦 Terada Katsuhiko
 友枝 望 Tomoeda Nozomi
 中村 圭 Nakamura Kei
 長岡 朋恵 Nagaoka Tomoe
 野村 敦 Nomura Osamu
 原仲 裕三 Haranaka Koso
 ばんば まさえ Bamba Masae
 一畝田 徹 Hitokuwada Toru
 前川 義春 Maekawa Yoshiharu
 和田 拓治郎 Wada Takujiro

東広島現代美術プログラム2003

白市DNA

2003年9月20日 | 土 | — 10月13日 | 月・祝 |

9:00—17:00

会場：広島県東広島市高屋町白市

〔主催〕 東広島市教育委員会
 〔協賛〕 白市景観形成委員会
 〔後援〕 NHK広島放送局 中国新聞社 中国放送 広島テレビ
 広島ホームテレビ テレビ新広島 広島エフエム放送
 東広島リビング新聞社 プレスネット KAMONケーブルテレビ

伊 東 敏 光

ITO, Toshimitsu



- ① [砂鉄の庭]、② [異水]、③ [指跡Ⅰ]、④ [指跡Ⅱ]、
⑤ [水景立像Ⅱ]

近年私は、「風景を彫刻として独立させたい」と考え、さまざまな方法によって制作を試みています。今回の「白市DNA」では、1999年頃から展開している「砂鉄の庭」のシリーズと、石彫による「水のある風景」をテーマとした作品数点を展示します。

風景は、人体のように固有の形体を持っている訳ではなく、全体に繋がりながら部分ごとに特徴を持っているため、彫刻という独立した構造を必要とする造形表現においては、境界線の見えない風景のような存在は、非常に表現しにくいモチーフです。しかし、自然が織りなすさまざまな風景は、私にとって興味の尽きない対象であり、それを自分なりの感覚で捉え、自分なりの方法で成立させようと試みているのです。

かつて日本人は、それを見事に表現し、生活の中に取り入れてきました。「庭」「生け花」「盆栽」「欄間」「掛け軸」等々。今回展覧会をおこなう白市には、日本の洗練された文化が、高い完成度を持ちながら維持されています。私が作品を展示させていただく重満家も、多少荒れてはいますが、江戸末期の美意識が至る所に反映されたつくりとなっています。

完成度の高い、この空間において、私の表現がどのように成立するのか、とても不安です。多分私の表現したい風景は、かつてこの家に関わった人達が求めた自然観とは違う側面を持ったもののだとは思いますが、この展覧会を通してかつての美意識を感じ、その違いと共通性を探りながら、表現者としての力を蓄えられればと期待しています。

- 1959年 千葉県生まれ
1986年 個展Gアートギャラリー（東京）
1987年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
アート・ドキュメント' 87（栃木県立美術館）
1992年 第5回現代日本具象彫刻展（千葉県立美術館）
1995年 歴史的建造物と芸術の共振展（広島）
2001年 第3回アジア現代彫刻展（韓国）
2002年 第1回国際ミニチュア彫刻展—2002台湾—（台湾）



重満家住宅 座敷（板間から）

笠 原 浩

KASAHARA, Hiroshi

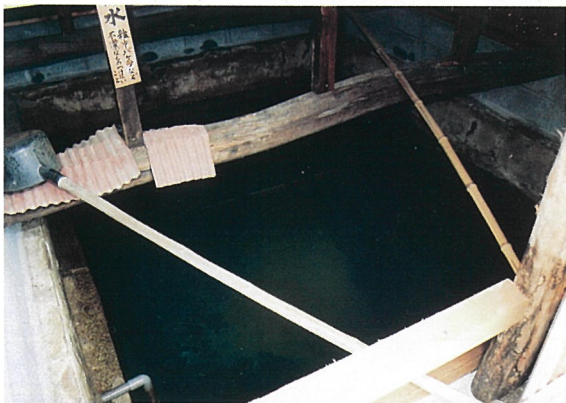


- ⑥ [イルカなんかが出てきちゃったりするトコロ・2003—白市]
- 都市を形成する要素として、ライフラインのインフラ整備は必要不可欠なものです。電気、ガス、水道……。昔は電気やガスなど無い訳だから（当然）水のあるところに人が集まる訳で、白市もそうなのでしょう。城下町として栄えた白市は、現在でも地下水路が張り巡らされてると聞きます。水のある処にはコミュニケーションが生まれます。

突然ですが、イルカです。
水の生物イルカには、目で見ただけでなく、音を使って物の形や大きさ、位置などを知る能力が備わっています。その能力をエコーケーション（音波による探索）といいます。

高度なコミュニケーション能力を持つイルカを、突然、白市に登場させたい衝動に駆られた私です。

- 1964年 新潟県生まれ
1993年 東京芸術大学大学院美術研究科博士課程後期デザイン専攻退学
2001年 ART CROSSING 2001 Hiroshima（旧日本銀行広島支店）
2002年 「都市×芸術」（旧日本銀行広島支店）



西の河

西の河 町の西側にあることからこう呼ばれています。白山城跡の麓にある「城河」とともに白市で最初に造られた井戸とされ、それから考えれば、すぐ南側に隣接する平賀氏の居館御土居の水の手として造られた可能性が高いと思われます。

井戸底の北東隅（鬼門）には一字一石経が入れられた甕が、現在も埋めてあります。

井戸の周囲は、現在では形が変わってしまいましたが、中を見ると一枚石で囲まれた様子や煉瓦を積んでかさ上げた様子がうかがわれます。

かつては、酒造りにも利用され、昭和30年代、上水道が引かれるまでは、生活に欠かせない水として大切にされていました。

木 村 育 子

KIMURA, Ikuko



- ⑦ [Gift] ・ [蜻蛉]
- 溢れ始めた情報から、人々は大量生産されたモノを所有することによって、自分であることを維持する。大量生産されるモノは、もともとの原形があり、原形から「型」（パターン）がつくられる。「型」には色や材質以外の視覚情報がある。その視覚情報をもつ「型」へ異なる色や材質のものを注ぐことによって、「見えるもの」を「見えないもの」にすることができる。「見えないもの」は見えていたときの、ある種の直感的視線によって見られていたことに気付かされる。「型を取る行為」によって、外から見る印象が、過去に経験されたものの見方から内的な印象に通ずるのではないだろうか。

- 1976年 広島県生まれ
2000年 個展 亀山発電所美術館（広島）
2001年 クンストラウム ツェーン（ドイツ）
2002年 広島市立大学大学院芸術研究科博士課程前期修了



伊原惣十郎家住宅 みせ

伊原惣十郎家住宅 明治初頭頃建てられたと伝えられる大型の町屋です。江戸時代から鋳物業を営み、江戸時代末期には広島藩の筆頭鋳物師（いもじ）を務めました。遺品としては、厳島神社本殿回廊の突端、客人社の脇に青銅製の灯籠が現存しています。

家の裏の小高い平地は鋳物工場の跡です。幅3間もある母屋の土間は、製品を一時保管したり、出荷する際の作業場としても使われたものでしょう。

現在、家屋は居住専用として使用され、台所や離れなど増改築によって当初の姿を留めていませんが、複雑でありながら調和のとれた室内は、明治以降の大型化した町屋の特徴をよく示しています。

木 村 東 吾

KIMURA, Togo



- ⑧ [放出する形状 vol.2]
- 白市が持つ情緒は、かつて日本の至る所にあったのではないだろうか。そこには間のゆとりと自然に同化する人や建物があつた。現代社会において我々は、自然の特恵を忘れ、慌ただしく時を消化している。私が白市で得た特別な間のゆとりは、生活の間であり、自然の間であつた。それは、外に広がっていく空間と内に畳み込まれていく空間であり、それはまた歴史の痕跡でもあつた。私はその痕跡を一つ一つひもをほどいていくように思い巡らし、再びその表象を築いていったのである。

- 1978年 広島県生まれ
2001年 二科展広島支部展 新人賞 国際文化財団奨励賞受賞
2002年 広島市立大学大学院芸術研究科博士課程前期修了
世界遺産 白川郷芸術祭（岐阜・富山）
倉橋アートドキュメント—臨界域—（広島県倉橋）
2003年 綿引道郎とその教え子達展（広島県三次）



大藤家倉庫

大藤家倉庫 かつて焼酎やみりんの製造に携わっていた大藤家の精米所があつたところです。白市の大市では、この店の焼酎カスやみりんカスが、人気のみやげものだったそうです。

後藤 佑介

GOTO, Yusuke



⑨ [link]

数十個の間知石から成る作品、linkは、もの（石）ともの（石）とのつながり、関連性を意図したもの。また、石組を見せる作品とした。

本来、石組は、それ自体が主体とされることがなかったが（石垣など）、今回、それを中心とした。

石組は、野外空間にあるという通常理念を、白市の歴史的建造物・室内空間に設置することで通常理念の超越を試みた。

1980年 愛知県生まれ

2002年 つやま芸術祭

2003年 広島市立大学芸術学部卒



伊原惣十郎家住宅（外観）

伊原八郎家住宅 大正4年に建てられたこの住宅は、大正のモダンな時代背景のもと、数寄屋風の建築技術を駆使した凝った意匠が随所に見られます。入母屋の屋根にはややむくりをつけ、小破風を加えています。基礎の石や繁格子窓など見所は多いのですが、圧巻は「御成門」です。

芸備銀行の支店だったこともあり、土間のつくりはそのころの名残をとどめています。

櫻井 友子

SAKURAI, Tomoko



⑩ [“かわ”の神]

初めて白市を訪れたとき、私は独特の空気に包まれた。訪れるたびに私を包むその空気は、漠然とした中にも、強さ、静けさ、厳しさ、やわらかさを持っている。その空気の正体、それは“かわ”の神である。

白市では、湧き水（井戸）が随所にあり、地元の人々は、そこを“かわ”と呼ぶ。商業の町として栄え活気に満ちた時代も、今現在も、住民の生活のそばには変わらず“かわ”が湧き続けている。白市のDNAの中に太く組み込まれた“かわ”は訪れた人々を包み込み、何かを問いかけるのである。

私は、その問いかけに答えるべく、“かわ”の神の存在を形にした。設置した土間は“かわ”の水面にみたてた。土間が作られてから現在に至るまで、そこを訪れた人々の足跡によってできた波は、人々が刻んだ歴史である。

1978年 長崎県生まれ

2003年 広島市立大学芸術学部卒



伊原八郎家住宅（外観）



伊原八郎家住宅（土間）

近藤 亘

KONDO, Toru



⑪ [円相図]

白山城の築城、町の成立、そして現在までの500年。更にこれから先の500年。人は永い歴史を直線的な図式に置き換え、始点から各到達点までの道程に潜在する途中段階の認識をおぼろげにしています。

しかし、個々の現象は、実に緻密な因果関係により成り立っており、差別などはありません。

過去、これから形作られるであろう未来、そしてそれらを構成する一瞬の集まりは、円相を描くがごとく表現されることが自然であると考えます。

結果のみが一ではなく、段階もまた一であり、全ての一が価値を越えた地平の上に円を成しているのだと思います。

1976年 愛知県生まれ

2001年 広島市立大学大学院芸術学研究科修了



重要文化財旧木原家住宅 座敷（みせより）

重要文化財旧木原家住宅 江戸時代前期の寛文5（1665）年に建てられた旧木原家住宅は、平入りの規模の大きな町屋で、坂道の表通りに面しています。入口は正面右側に大戸を構え、両側には格子戸をはめ込んでいます。

格子戸の左側、表通り側に床の間を持つ座敷を設ける特徴的なつくりになっています。

江戸時代には、正面左端の土塀のところが路地門になっており、座敷に直接上がれるようになっていました。

二階は、つし二階と呼ばれる天井の低い屋根裏で、物置部屋として利用されていました。普通の二階に見られる採光用の窓もなく、外壁はすべて漆喰を塗り込めた白壁となっています。

旧木原家住宅は、わが国で最も古い町屋の一つであり、各所に他では見られない様々な特徴が認められます。

近藤 博明

KONDO, Hiroaki



⑫ [生きる力：土地の記憶から]

さあ、この土と水を使って、この場所で土をこねて一つの造形物を創りましょう。今、ここに私たちが生きているというエネルギーを形にしましょう。

この行為の記憶が、この造形物を創ったという思い出として残り、土地の記憶として時間の中に浸み込んでいく。この土地を歩くと様々な人々が楽しい事、つらい事、苦しい事等の気持ちを抱き生活していたであろう、長い、長い時の積み重ねを感じる。我々の口から発せられる一つ一つの言葉が、相手の気持ちを楽しませたり、悲しませたりする。人は悲しみや苦しみを抱え煩悶する時、その苦しみや悲しみを乗り越えていく道を求める。そして自我の執着から解き放たれた時、争いがなく、憎しみがなく、すべてが平等で、お互い支えあっていく世界を感じるのではなかろうか。

⑬ [干上がった海で釣りをする]

海から離れたこの土地にも、醤油をつくるため、塩が運ばれてきている。

かつての瀬戸内の塩田製塩も今はない。その豊かな海も汚染され、環境の変化により海は干上がり、生き物の住めない日が来ないことを祈りつつ・・・。

⑭ [壁人間]

1947年 広島県生まれ

1974年 アーバン・オープン・スペース・イン・ヒロシマ（広島）

1981年 '81国際メール・アート展（イタリア）

1983年 ソウル国際ドローイング展（韓国）

1987年 第4回釜山青年ビエンナーレ（韓国）



徳光酒店



土宮神社参道

A photograph showing a cleared area, possibly a former agricultural field, with a dense forest in the background. The foreground is covered in dry, yellowish-brown grass and some scattered debris. A small, simple structure is visible in the distance, partially obscured by trees.

鋳物工場跡 幕末、広島藩の筆頭鋳物師、伊原惣十郎家の鋳物工場跡です。

Dr. Yoon Gook

A photograph of the interior of the Kofu City Museum's main hall. The space is characterized by dark wood paneling and a raised wooden platform. In the foreground, a small table holds a small object. A sign with the number '1001' is visible on the floor. The background features a large window with a grid pattern.

重要文化財旧木原家住宅。板間・土間

A circular portrait of a man with dark, curly hair and glasses, wearing a dark shirt. He is looking directly at the camera.

A photograph of a traditional Japanese building, likely a residence or a small shop. The building has a two-story structure with a white upper story and a dark, possibly black or dark brown, lower story. The roof is tiled with dark tiles. A small sign with the number '20' is visible on the building. The building is situated on a street with other buildings in the background.

重満家住宅 土間

白市の町を特徴づける大型の町屋の一つです。

1997年 第3回JINEN展



重要文化財旧木原家住宅 二階

白市DNA

散策マップ

- ① [砂鉄の庭]
- ② [異水]
- ③ [指跡Ⅰ]
- ④ [指跡Ⅱ]
- ⑤ [水景立像Ⅱ]
- ⑥ [イルカなんかが出てきちゃったりする
トコロ・2003 - 白市]
- ⑦ [Gift]・[蜻蛉]
- ⑧ [放出する形状 vol. 2]
- ⑨ [link]
- ⑩ [“かわ”の神]
- ⑪ [円相図]
- ⑫ [生きる力：土地の記憶から]
- ⑬ [干上がった海で釣りをする]
- ⑭ [壁人間]
- ⑮ [追憶]
- ⑯ [MASK-2003-]
- ⑰ [RINASCITA]
- ⑱ [WELCOME TO MY LUPINE HELL]
- ⑲ [TITLE SEQUENCE FOR MOIR-
VISION FILMS]
- ⑳ [記憶2003]
- ㉑ [alchemy]
- ㉒ [chromospheres]
- ㉓ [formulation]
(フォーミュレーション)
- ㉔ [Stream 小川]
- ㉕ [エントロピー最大]
- ㉖ [深化2003]
- ㉗ [TWINS-04@shiraichi]
- ㉘ [湧]
- ㉙ [sense]
- ㉚ [REALITY OF FAMILY]
- ㉛ [REALITY OF LIFE AND DEATH
(Ver.4)]
- ㉜ [割りより]
- ㉝ [十字スリットのある六方石]
- ㉞ [穿孔]
- ㉟ [記録馬鹿]



友 枝 望

TOMOEDA, Nozomi



白市地区の500年という歴史を、リアルな時間として認識することはイメージの中でしか存在せず、またその時間を刹那に閉じ込めることは容易ではない。

㊹ [alchemy]

私は使用済みのタバコのフィルターを綿状にまで細分化した。この場所では、過去たばこの製造がおこなわれていたようである。Alchemyとは、「錬金術」と訳される。「錬金術」とは卑金属を貴金属に変化させたり、不老不死の万能薬を製造したりすることを試みた原初的な科学技術である。金色に輝く綿は、あたかも金糸を作り出すかのように見える。この歳月を心にとどめ、新たな輝きを求める。

㊹ [chromospheres]

煙りのようにも、また浴槽の中でうごめく水のようにでもあり、それは長い年月を経ても変容せず、時折みせる表情は無似でもある。地上より仰ぎ、その時をとらえた作品。

㊹ [formulation] (フォーミュレーション)

空間それ自体と、主体にとっての空間の橋渡しをするもの。主体を内包するものとしての個々に内在する無意識の中に埋もれた眼差しを再認識させる。

1977年 大阪府生まれ

2002年 個展 大和ラヂエーター製作所 (広島)
「Dasein」展 (ドイツ)

2003年 広島市立大学大学院芸術研究科博士課程前期修了
ホープス2003 (広島県福山)



たばこ乾燥小屋 外観



たばこ乾燥小屋 内部

中 村 圭

NAKAMURA, Kei



㊹ [Stream 小川]

近隣の家々から引かれた水は、坂道に流れ出し小さな小川をつくります。この小川は、天気や車や人の往来に影響を受け、その形を常に少しずつ変えながら、やがて排水溝へ注がれます。この作品は、水の流れ方を普段とは少しだけ変えることによって、水のあり方にあらためて目を向けることを促します。水はどこから流れてきているのだろうか。なぜそのような流れ方をするのだろうか。どこに水は流れていくのだろうか。この作品はそうしたちょっとした問いのきっかけを提示します。作品を流れる水は水道の水ですから、この作品はとても多くの家々とつながっています。白市のカワと呼ばれている地下用水路が、この作品を考えるきっかけになりました。

1975年 大分県生まれ

2003年 広島市立大学大学院芸術研究科博士課程後期単位取得
「スラッシュ」展 (広島)



本町・栄町交差点付近 (坂上から)



本町・栄町交差点付近 (坂下から)

長 岡 朋 恵

NAGAOKA, Tomoe



㊹ [エントロピー最大]

『枕草子』の現代語訳を一部抜粋してみる。

むさくるしく思えるもの

刺繍の裏側。まだ毛の生えそろっていないネズミの子が、何匹も巣の中からころがり出たとき。裏をまだつけていない毛皮の着物の縫い目。猫の耳の中。とりわけきれいとも思えない所が薄暗い時。それほどきれいでない女が、子をたくさん抱え、世話をしている様子。あまり愛していない妻が長患いしているのも、男としてはわずらわしい気持ちであろう。

『日本の歴史』(ネリ, ドウレ著 創元社)より

今回の作品は、この散髪屋のソファーの中に動物の赤子が住んでいるとし、それらが溢れ出す様を、私自身が見てみたくて仕方がなくなった事から始まった。

この現代語訳を目にした時、私は既にこの作品を制作していたが、自分にとって心地よく、心くすぐられるものも、清少納言にとっては、どうやらむさくるしく、愛していない妻の長患いと一緒だというのだから困ったものだ。否、だから面白い。同じものを見て抱く感情が人間こうも違うものなのだ。

清少納言がもしこれを見たら、むさくるしいと言うのだろうか。

1980年 広島県生まれ

2002年 広島市立大学芸術学部卒
「秘郷」展 (広島)
HOPE展 (福山)

2003年 綿引道郎と教え子達展 (三次)



樽理容室

樽理容室 現在の場所で営業を始めて58年になる町の理容室です。ご主人は大阪で修行をされ、現在も現役でご活躍中です。

建物はモダンな雰囲気のもルタル造りの洋館風で、長い年月を経してきた時の重みを醸し出しています。

野 村 敦

NOMURA, Osamu



㊹ [深化2003]

これまで石の工場で働きながら、作品を作ってきました。

周囲の雰囲気にも馴染み、溶け込んで、さりげなく存在する、仕事と彫刻の一体化を目指してやってきました。そんな中から出てきた作品です。この作品は、全ては大地から生まれ、大地に帰り、最後は自然しか残らないということを表現したものです。

1957年 広島市生まれ

1980年 九州産業大学芸術学部卒

1987年 Sculptureヒロシマ' 87 ('91年まで)

1996年 第4回公募「広島美術」佳作賞受賞 (以後毎回入選、第5回優秀賞受賞)

1997年 CARGO展 (広島県呉)

1999年 個展 エビデンギャラリー (広島)

2000年 Hiroshima Art Document 2000 (広島)

2001年 第19回現代彫刻展入選 (山口)

2002年 Hiroshima Art Document 2002 (広島)



御土居遺跡 (後方は白山城跡)

御土居遺跡 白市の町並みの西側、小高い丘の上にある戦国時代の居館跡です。東西約100m、南北約70mの規模は、高屋地域では最大規模です。西端には平賀弘保が家内安全の祈願のため勧請した荒神社が現在も残っています。館跡南西の土居池の土手が居館への大手道となっており、南側斜面に江戸末期まで残っていた石垣とともに居館の正面観を形づくっていました。

県道の建設予定地となっていることから、数次にわたって発掘調査が行われ、16世紀後期の土器や中国陶磁器とともに建物跡や石組、区画溝などが多数見つかっています。

関ヶ原の戦いの後、平賀氏はこの地を去り、江戸時代には庄屋の屋敷となりましたが、18世紀後期以降廃れ、その後牛馬市、白市女学校 (現、河内高校) などに利用されました。

原 仲 裕 三

HARANAKA, Koso



㉔ [TWINS-04@shiraichi]

かつてこの地は、山陽と山陰を結ぶ商業の町として成立していたと聞いています。全て歴史は人々の便利さの飽くなき追求の物語であるとも考えられます。ほんの少し前の子どもたちは「山の向こうには何があるんだろう？」と思ったら、山のてっぺんに立ち、そこから遠くを眺めて、確かめもしました。そして、太陽を身体や肉体に浴びせ、風や動物たちの囁きを聞いて、もっともっといろいろなモノをここに刻んだのでは、と思います。この地でわずか500年前の先人の行ったことに想いを巡らせると、今が見えてくるのではと思います。苦しいけれども楽しい旅は、道が曲がりくねっているからこそだと思うのです。

- 1957年 島根県生まれ
- 1982年 東京造形大学絵画専攻卒
- 1990年 第1回公募「広島美術」奨励賞（94佳作賞、00大賞）
- 1991年 '90ふくやま絵画プロジェクト受賞
- 1992年 個展 エビデンギャラリー（広島）
- 1993年 第2回青木繁記念大賞展 優秀賞（福岡、福島）
- 1994年 アジアひろしま芸術大賞展 佳作賞
- 1995年 Hiroshima Art Document' 95（広島）
- 1997年 CARGO展（広島県県）
- 1998年 「加害／被害」―絵画は何を暴くか―（東京）
- 1999年 脱・現代美術教養論（東京）
- 2000年 作品を読む展（東京）
エキスポ2000 art project “BaLANCE2000”（ドイツ）
2000:YEUR OF ARTSTIC BOMBS（ユーゴスラビア）
- 2001年 「2001年 宇宙からの旅」展（福島）
- 2002年 Hiroshima Art Document2002（広島）
都市×芸術展（広島）
- 2003年 表現の成り立ち（山口）



ばんば まさえ

BAMBA, Masae



㉔ [湧]

白市で、今も二つの井戸が大切に守られている。昔、そこは貴重な飲料水を求めて多くの人々が訪れた場所だったそうだ。水には人を惹き付ける力がある。そこには生きるために必要だという理由がもちろんある。が、それだけではないと思う。穏やかな水の表面を眺めているとなんとか安心して、その艶やかな表面に手を浸したくなる。地面から滲み出た潤いは、いつか流れとなってあちこちに拡がり、最後にまた大地に戻る。水は変化しながら自然の中を廻ってゆく。湧き水のイメージは循環という終りも始まりもない環の中にありながら、ひとつの区切り、再生という感覚を印象づける。

そんな、井戸から思い巡らせたイメージを染色の技法で表現したいと思い制作した。

㉔ [sense]

ゑびす神社の扉は、普段閉ざされている。そこに暮らす日常では、きっと当たり前の景色だろう。今回、扉を開けて作品を設置することで普段とは違う、非日常の風景を見てもらいたいと思った。神社という神聖な場所から生ずる目に見えない「気」のようなもの（それは、エネルギーと言い換えられるのかもしれない）を私なりに表現できればと思っている。

- 1967年 京都府生まれ
- 1991年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修了
個展 ギャラリー射手座（京都）
- 1993年 個展 GALLERYGALLERY（京都）（94、95、97、99、01）
個展 GALLERYPREVIEW（京都）
- 1996年 Vth TRIENNIAL INTERNATIONAL OF MINITEXTILE（フランス）
JCC ART AWARDS（京都）
- 1997年 UNDER WATER EXHIBITION' 97（鹿児島）（98、99）
- 2000年 美工のあゆみ創立120周年記念展（京都）
- 2001年 京都府美術工芸新鋭選抜展（京都）
AQUART in OKINOSHIMA（島根）（02）
- 2002年 Soft Sculpture From The East-Japanese Sense of Beauty（デンマーク）

恵比寿神社 本町の坂上、旧木原家住宅の北側に通りに張出した形で建っています。現在の社殿は、昭和初期の再建ですが、側には、県内最大とされるユスノキが立っていて、長い歴史を感じさせます。



恵比寿神社

一 鍬田 徹

HITOKUWADA, Toru



㉔ [REALITY OF FAMILY]

「白市」という町は、500年の古い歴史を持つそうですが、その500年前も現在も、そして500年後も連綿と続くであろう「命のつながり」、これが作品のテーマです。

ある時、私は自分の家の家系図を見る機会がありました。当然のことながら、私には父と母がおり、その父と母にもそれぞれ父と母がいて、その父と母にも・・・考えるときがありません。私たちは日々の生活に追われると近視眼的になりがちですが、多くの祖先がいて、初めて自分が存在しているという事実改めて驚かされます。私たちは好むと好まざると、そういう過去の記憶（DNA）を持って生まれ、次の世代に引き継いでいきます。

この『REALITY OF FAMILY』という作品は、「FATHER」「MOTHER」「BROTHER」「SISTER」という4つの作品で一つの空間を構成しています。

『REALITY OF FAMILY <FATHER>』は「父なるもの」、『REALITY OF FAMILY <MOTHER>』は「母なるもの」をそれぞれ表しています。「生きる」ことの実感を見失いがちな現代に、改めて人の強さ、たくましさ、豊かさを再認識し、それを象徴するような、大きくゆったりした形で表現しています。また、『REALITY OF FAMILY <BROTHER>』と『REALITY OF FAMILY <SISTER>』は「子どもたち」を表しています。一般的な日本人の名前を男女別に並べています（あなたの名前はありましたか？）。

この作品は、たとえ時間が過ぎても変わらない（あるいは変わらないでほしい）親子や家族の愛情を表現しています。タイトルにある「REALITY（リアリティー）」という言葉は「実感」あるいは「現実感」という意味です。この言葉を使ったのは、本当は大切にされなければならない「生きる実感（REALITY OF LIFE）」という感覚が、特に現代では希薄になっているように感じるからです。最近の戦争や事件のニュースを見ても、どれだけの「REALITY（リアリティー）」を持って私たちはその映像を見ているのでしょうか。9、11の事件が起きた時、「まるで映画のようだ」とは、よく聞かれた言葉です。バーチャルな世界とリアルな世界の境界線は、知らず知らずのうちに私たちのなかで曖昧になってきつつあり、これはとても恐ろしいことです。



旧木原家住宅 土蔵 外観

情報化がますます進むであろう今後の世界に対して、「生きる実感（REALITY OF LIFE）」は、私たちにどうしても必要な感覚であるように思います。そしてそれは、私自身にとっても、彫刻制作を通して考えていきたい重要なテーマです。

以上のことをふまえ、作品を見ていただき、そして少しでも共感いただけたとしたら、制作者としてこんなにうれしいことはありません。

㉔ [REALITY OF LIFE AND DEATH (Ver. 4)]

この作品も、基本的に『REALITY OF FAMILY』と同じように「命のつながり」あるいは「生きる実感（REALITY OF LIFE）」をテーマにした作品です。

これは、牛の頭の骨をモチーフにしています。骨というどうしても「死」を連想させてしまいますが、普段意識していなくても、私たちの誰もが骨を持っています。そう考えると骨は「生」の象徴でもありうるのです。

改めて見ると骨はとても有機的で魅力的な形をしています。人間にも様々な顔や形があるように、牛骨もよく見るとひとつひとつ違います。今回モデルにした牛は、鼻や口の先端部分が長く、まるで流線形をしたスポーツカーのような形をしていました。自然の形は無駄がなく、それだけで十分美しい形をしたものが多くあります。その自然の美しさに近づきたくて、この作品を制作しました。

- 1964年 千葉県生まれ
- 1988年 日展（98、00）
白日展（89白日賞、97長島美術館長賞）
- 1990年 千葉大学大学院教育学研究科美術教育専攻修了
- 1992年 現代日本具象彫刻展（94、98）
- 1995年 日彫展（奨励賞95、96、97、日彫賞01、02）
- 1996年 昭和会（日動画廊）
- 1997年 日彫新選抜 翔展（ギャラリーせいほう）
- 2000年 個展 ギャラリーオカベ（東京）
- 2001-2002年 個展 すどう美術館（東京）
- 2003年 個展 ガレリア・グラフィカbis（東京）



旧木原家住宅 土蔵 一階

旧木原家住宅土蔵 重要文化財旧木原家住宅の北に隣接して建つ土蔵です。建築年代は19世紀後期ですが、旧木原家の敷地内に残る数少ない建物のひとつとして貴重な存在となっています。

前 川 義 春

MAEKAWA, Yoshiharu



㊼ [割りより]、㊽ [十字スリットのある六方石]、㊾ [穿孔]

平野部にある戸数70程の小さな村で私は生まれ育った。村の中程には浄土真宗（一向宗）のお寺がある。寒村であったのでそれほど立派なはずはないのであるが、子どもだった私には、堂々とした本堂と幾本もの大木のある、とても大きなお寺であったという印象が残っている。

日本海と白山連峰に囲まれ、一向一揆で知られるように、雪深く、厳しい自然の中に人々の生活があった。私の子どもの頃の記憶の中でお寺の印象がとても強いのは、そのような過酷な自然の中で、信仰を日々の生活の心の支えとしてきた父母や村の人々の姿を多く目にしたからだろう。そこには目に見えない結束と掟と道徳があり、勤勉に働く大人たちの姿に、子どもの私はなにか恒久的な大きなものに包まれて生きている心の安らぎを覚えていた。

高校を卒業と同時に村を離れ、東京、ミュンヘン、広島と移り住んだ。いずれも大都市であり、子どもの頃の感覚は遠い昔のものとなっていた。

私の生まれた村とは比べようもないが、城下町であり、豪商が住んだ白市は、江戸時代以来の町並みの一端がいまだ現存し、独特の景観が長い歴史と繁栄を感じさせる。その中で浄土真宗の寺、養国寺へ続く参道は、苔の中に御影石の石畳が続き、清楚で美しい。境内や本堂も見事に精美で、住職や檀家の厚い信仰心が感じられる。四百年近く続くというこの寺は、恒久の静かな空気の中にあり、ふと子どもの頃の私の感覚を甦らせてくれる。私は、この養国寺の参道と境内に自分の石の作品を設置してみたいと考えた。

石は、何万年もの間地下で眠り続け、そして地上に表出し風雨にさらされながらも何万年も現存することができる強靱さと美しさを兼ね備えている。また、石の中には目に見えない摂理があり、さながら一つ一つの石が、小宇宙を形成しているともいえる、興味の尽きない素材である。

長い歴史を感じさせる白市の景観に、恒久の感を持つ石の作品を置くことにより、私の子どもの頃の感覚を、より明確に表出できないかと考えた。

養国寺への参道、二本の石柱の間を通り、石畳を進む。

養国寺参道第一踊場：作品32 [割りより] 2003 御影石

インド産黒御影石。長方形の石に丸みを加え、縦長の中央部で割り、わずかに割り面を開いて提示する。一つ一つの石の中には石圧と石目という摂理がある。石を割る時には、これに物理的条件が加わり、幾万通りもの割れの表情を表す。また、石は誕生以来、割られた瞬間、初めてその肌が空気に触れる。生誕の緊張と個性の形成。

養国寺参道第三踊場：作品33 [十字スリットのある六方石]

2001（2003に加成形）玄武岩

長崎県佐世保産玄武岩。通称六方石に穿孔作業を加え、一本の石を割り抜き、並べて提示する。陰と陽、天と地、相反するものの調和と緊張関係。

養国寺境内：作品34 [穿孔] 2003 御影石

広島県倉橋産御影石。横方向に左右から穿孔作業を加え、一本の石を割り抜き提示。過去と未来、現世と精神世界を繋ぐものを主題

に、本堂と参道に続く、町の方角を軸に設置。

私たちには、いつも子どもの頃のような、なにか大きなものに包まれて生きているという感覚が必要なのではないだろうか。それが、より自由で闊達な未来への創造力と活力を産む基になるのではないかと思っている。

例えば、それが500年前もそうであったし、これから500年先もきっとそうあり続けるであろうという、変わらぬものへの安心感とそれを基盤としてより大きな変革を希求するという、相反する二つの構造の均衡を保ちながら両立、調和させる方法をさがす必要があると思っている。

白市でのこのたびの芸術プログラムは、このようなことを考えさせ、実践的な実験の場を与えてくれる貴重なものである。

1955年 福井県生まれ

1982年 東京芸術大学大学院美術研究科修了

1983年 個展 ギャラリー山口（東京）

1985年 国立ミュンヘン造形芸術大学入学

1986年〜クラスタル国際石彫シンポジウム（オーストリア）やフィラニー国際石彫シンポジウム（ハンガリー）、ブルキナ ファソ国際石彫シンポジウム（西アフリカ）など各国際石彫シンポジウムに参加、制作

1987年 個展 ギャラリーホフマン（ミュンヘン）

1989年 マイスターシュラー取得

1991年 ミュンヘン造形芸術大学修了

1993年 個展 茶屋町画廊（大阪）

1995年 都市の成熟と芸術の役割―歴史的建造物と芸術の共振（広島）

1996年 国際交流野外彫刻展（福岡）

1997年 福井市彫刻コンクール大賞受賞（福井）

1999年 アジア現代彫刻 日本・韓国・台湾（台湾）

2001年 Art Crossing Hiroshima-Project2001 Spring（広島）

2002年 倉橋アートドキュメントー臨界域ー（広島県倉橋）



養国寺参道

養国寺 浄土真宗本願寺派。「賀茂郡誌」によると「往古は真言宗にして元暦年間（1184～1185）創建という」とあります。過去帳によれば、当寺第一世は天正8（1580）年入寂とされ、天正期にすでには浄土真宗であったことがわかります。

本堂は、18世紀前期の建築と考えられます。年代が古いわりに装飾的で、安芸地方を代表する大規模な浄土真宗本堂のひとつです。

和 田 拓治郎

WADA, Takujiro



㊿ [記録馬鹿]

今日まで、現代社会における「欲望」の精神世界を風刺してきて、この白市に立ち感じたことは、まず、地域の持つ歴史継承の強固な意志であった。思うに、情報化社会では、集計・分析により、向上への選択肢を絞り込むが、歴史継承においてそれは必ずしもあてはまらない。

したがって、記録することの重要性は、盲目性をあわせ持つ事であることを再認識するために、記録主義への風刺を含意した作品となった。

食のスロー化ならぬ、「スローデーター」の提案、並びにその可能性を改めて現代に問う。

1975年 広島県生まれ

1998年 第83回二科展特選

1999年 中日青年彫塑展（台湾）

2000年 広島市立大学大学院芸術学研究科前期修了作品サロン・ド・ジュネス賞

第1回力学おもちゃコンテスト アーティスティック賞

2001年 第86回二科展 二科賞

2002年 第2回音の彫刻コンクール 奨励賞

個展 アストラムライン駅舎（広島）

倉橋アートドキュメントー臨界域ー（広島県倉橋）

第36回現代美術選抜展（北海道）

2003年 広島市立大学大学院芸術学研究科博士課程後期 博士号取得

その他の白市の史跡・文化財

光政寺 縁起によれば永正2（1505）年、白山城主平賀弘保の創建と伝えられます。慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いの後、平賀氏がこの地を去ると廃寺となりました。

その後、平賀氏の末裔木原光政が元禄2（1689）年に再興したと伝えられます。

本堂は桁行3間のあまり大きくない建物ですが、様式上も元禄2年の建築と考えられ、17世紀に遡る真言宗本堂として貴重な存在です。



土宮神社

土宮神社 伊勢神宮外宮の四別宮の一つ土宮（つちのみや）を勧請したものです。この地は、江戸時代の前期、元禄年間くらいまでは伊勢屋敷と呼ばれ、神社はありませんでした。そのことからすると、伊勢神宮のお札を配って歩く伊勢の御師と呼ばれる人たちの宿所があったものと考えられます。現在の本殿は、17世紀末から18世紀前期の建築と考えられていますから、その頃神社として整備されたものと考えられます。

白市の祭りで担がれた「神明さん」も伊勢神宮のことですから、白市の信仰に深く根付いた神様だったのでしょう。

鶯塚 松尾芭蕉の門人野坡の高弟で風律という俳人が広島にいました。13回忌にあたる寛政5（1793）年、白市の弟子たちが建立した追慕碑です。

「鶯やとなりなれとも此地の枝」の句から鶯塚と名付けられました。



稲荷神社 栄町の西端にあります。本殿は安政3（1856）年に建てられました。この境内を造るために、御土居跡から石垣の石を残らず運んだと伝えられます。

